

2015年9月13日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 15章 30～37節

説教：泣きながら山を登るダビデ

あらすじ

第二サムエル記を続けて見ております。どこを開いてもダビデを通してイエス・キリストの姿が浮かび上がってきました。今日の箇所もそうです。いったいどこに主の姿があるのか、これから見て参ります。

ダビデの三男アブシャロムは父ダビデに背き、自分こそイスラエルの王であると宣言いたします。これを聞いたダビデは、寝耳に水の状態でした。大急ぎでエルサレムから脱出します。たくさんものを後に残していかなければなりません。しかし、神の契約の箱だけはしっかりと持ち出します。ダビデの家来が次から次へとアブシャロムに寝返り、ダビデは急速に力を失っています。自分の力でアブシャロムに勝てるかどうかまったく自信がありません。しかし、神の箱がそばにあるなら、神は力を与えてくださるのではないかと。ダビデは最初そのように考えます。しかし、ダビデは次第に問われていきます。あなたを救うのは誰なのか。口では神が救ってくださると言いながら、よく自分の動機をさぐってみれば、神の箱を利用して自分の力で自分を救おうとしているのではないかと。それは本当に信仰と言えるのか。ダビデはそのことに気がつきます。神の御心であるならもう一度エルサレムに戻ることができる。しかし、もし自分が神の御心にかなわないと言われるのなら、「どうかこの私に主がよいと思われることをしてくださるように」と言って、握っていたものを手放し、神の箱をエルサレムに戻すことにしました。それが前回までの

あらすじです。

1 オリーブ山を泣きながら登る

1) アヒトフェルの裏切り

皆さんも経験があるかもしれませんが、信仰によって大切なものを手放したとき、こんなことを思うのではないのでしょうか。「神はここまでやった私の信仰を見てくださり、豊かに祝福してくださるに違いない。」そう心のどこかで期待するのです。

ダビデはどうだったのでしょうか。神の箱を手放すことはダビデにとっても大きな決断でした。ダビデも心のどこかで、神は自分を祝福してくれるかもしれないと期待したかもしれません。しかし、その先に待っていたのは最悪の知らせでした。

31節。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に加担している」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにして下さい」

アヒトフェルはすぐれた頭脳と判断力を兼ね備えていた人で、ダビデの参謀としてダビデを支えていた最重要人物です。アヒトフェルのことばは、まるで神が語るようであったと、他の箇所でも書かれているほどです。これまで、ダビデは何か大きな決断を迫られたとき、何度もアヒトフェルに相談をしてきました。そのアヒトフェルがアブシャロムの側に寝返ってしまいました。ダビデの手の内をすべて知っています。ダビデの強いところはもちろん、どこに弱点があるのかもわかっ

ています。大事な軍事機密がごっそりと敵の手に渡ったも同然です。

## 2) 祈るダビデ

ダビデの最も怖れていたことが起きてしまいました。足もとががらがらと崩れ落ちていくような恐怖が襲ってきました。ダビデは、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにして下さい」と祈るほかなにもできません。

聖書を読むと 30 節でまずオリーブ山を登るということが出て来て、山を登っている途中でアヒトフェルの裏切りを知らされたかのような順番で書かれているかのように見えます。しかしここは、アヒトフェルが裏切ったという知らせを聞いて、ダビデもそして民たちも皆泣きながらオリーブ山を登っていった、そういう順番だろうと思われま

す。頭をおおい、泣きながらはだして山を登っていく。尋常なことではありません。それでも、ダビデは神を礼拝する場所を求めてオリーブ山を登っていきます。歩きながらダビデはいろいろなことを考えました。神は自分を見放したのだろうか。なぜここまで自分は苦しまなければならないのか。もしかして神は自分が犯してきた罪を赦しておられないのだろうか。それでこんなにも悪いことが次から次へと起こっているのだろうか。若いときから多くの戦いを経験し、苦難を乗り越えてきたダビデですが、もうだめかもしれないという思いが頭をよぎり始めます。

## 2 山の頂で

### 1) アルキ人フシャイ

オリーブ山の頂で礼拝していたとき、ひとりの人物がダビデに会いにやってきました。

その名は、アルキ人フシャイ。聖書を調べても、フシャイに関する情報はそれほど多くはありません。37 節に「ダビデの友フシャイ」とあります。また、このあとにフシャイはアブシャロムと会見する場面が出て来ますが、そこを見るとアブシャロムはフシャイがダビデの友であることをよく知っていたようです。アルキ人とは何者であるのか、これもよくわかっていませんが、一節によればイスラエルの氏族であるベニヤミンに属していたのではないかという方もいます。いずれにしても、「ダビデの友」と称されるほど、ダビデの側近中の側近であったことは確かです。おそらく事情があつて、ダビデがエルサレムから脱出する際にはいっしょに来ることができず、後からダビデを追いかけたのかもしれませんが。彼の着ていた上着は裂かれ、頭には土をかぶり、ダビデといっしょに悲しみます。

### 2) ダビデの計画

ダビデはフシャイの顔を見ていろいろなことを思いました。こんな有様で逃げなければならぬ自分を見捨てないで、いっしょに自分のそばにいてくれて、涙を流しながら悲しんでくれる友人を見つけて喜びます。いっぼう、フシャイが自分といっしょに行ったとしても、未来が開ける訳ではありません。確実に死が待っています。自分の息子のことでそこまでつらい目に遭わせてよいだろうか。ダビデはそのことで心苦しく感じます。

そこでダビデはフシャイにこのように語りかけます。34 節。「もしあなたが、私といっしょに行くなら、あなたは私の重荷になる。しかしもし、あなたが町に戻って、アブシャロムに、『王よ。私はあなたのしもべになり

ます。これまであなたの父上のしもべであったように、今、私はあなたのしもべになります」と言うなら、あなたは、私のために、アヒトフェルの助言を打ちこわすことになる。」

ダビデのことばはまだ続きますが、一旦ここで区切ります。ひとことと言えば、エルサレムに戻ってアブシャロムに嘘をつき、寝返った振りをして敵をさぐり、スパイをなささいということに聞こえます。皆さんこれをどう考えるでしょうか。十戒の九番目に「あなたの隣人に対し、偽証してはならない」とあります。ダビデの命令は律法違反にならないのでしょうか。

### 3) 「あなたのしもべになります」

注意深く聖書を読んでください。34節をくり返します。「王よ。私はあなたのしもべになります。これまであなたの父上のしもべであったように、今、私はあなたのしもべになります。」フシャイが言いなさいと命じられたことはただ一つです。「私はアブシャロムのしもべとなります。」これだけ。「私はダビデを裏切りました」というようなことは何も言っていない。フシャイがダビデのしもべであることには変わりがありません。その身分のまま、アブシャロムのしもべとなるのだということです。そんなことは詭弁だと言うのでしょうか。まやかしだと言って笑うのでしょうか。

## 3 イエス

### 1) しもべとなられる

では、私たちの主である方を見ていただきたいと思います。主はこう言われます。「わたしが天から下って来たのは、自分のところ

を行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。」(ヨハネ 6 章 38 節)主はご自分のことを証しされるときいつも父なる神のもとから遣わされたしもべに過ぎない者であるという言い方をされました。主イエスにとって父なる神は王であり、ご自分はしもべである。そのような関係です。

では主は私たちの前でどのような立場になられましたか。ピリピ 2 章 6~8 節。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

この方は私たちの前でしもべとなられました。私たちが主人で、この方がしもべ。それは、父なる神を裏切って私たちの側についた、ということではもちろんないはず。主イエスは、父なる神のしもべでありながら、同時に私たちに対してもしもべとしてふるまってくださった。それは詭弁でも何でもないことはおわかりでしょう。

ダビデとフシャイの関係も同じです。ダビデはそのまま王でありつつ、フシャイはダビデの友であるということもそのままにして、同時にフシャイはアブシャロムのしもべとなっていくのです。

敵に打ち勝つために考え出した言い逃れとか苦肉の策ということではありません。神の御真実はなにも曲げられていません。いや、むしろダビデがフシャイに語っていることは、やがてダビデの子孫として来られる主イエスの姿を示しているのです。

### 2) オリーブ山を登る

ダビデのことばから主イエスの姿が浮かび上がります。であれば、ダビデがオリーブ山を泣きながら登っていったということからも、主の姿が見えてくるのではないですか。

恩を仇でかえすようなことをするアブシャロムを、ダビデは憎んだのでしょうか。ダビデはなんとやったか。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」フシャイが派遣されていく目的もそこにあります。アブシャロムを滅ぼすためにフシャイが行くのではないのです。むしろ逆です。アブシャロムを助けるためです。フシャイもいのちがけです。アブシャロムがフシャイのことを信用せず、殺すかもしれません。もしそうなればすべての計画は終わりです。ダビデは、最期の望みをフシャイにゆだねます。

主イエスは、逮捕される夜、賛美の歌を歌ってから弟子たちとともにオリーブ山に登りました。その時主は言われました。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまづきます。」(マタイ 26 章 31 節)

私たちも主イエスにつまづき、この方を十字架にかけました。それでも主は私たちを滅ぼそうとは考えず、最期まで私たちのしもべとなられ、救うことをお考えになり、オリーブ山を泣きながら登っていきます。

主のあわれみを覚えます。